

「人」と「もの」とのかかわりと自我の育ちに関する考察(2)

～幼児における「感情を切り替える」体験と自己統制～

○ 西垣 吉之・寺見 陽子・高畑 千賀子・鈴木 みつ子・大石 千尋・宮部 彰子
(中部学院大学短期大学部)(神戸親和女子大学)

【目的】エリクソンによると、幼児期には筋肉の成熟に伴って「保持する一手放す」という基本的様式を生み、その調整過程での葛藤が自我の基本的態度を決定するという。研究(2)では、ものやひとのかかわりを通して、その調整過程における葛藤がどのように引き起こされ、「感情を切り替える」体験が為されていくのか、またそれが自己形成にどのような意味を持っているのかについて考察する。ここでいう自我の育ちとは、感情を切り返して自己統制する、言葉で自分の世界を表現したり行動統制したりする、ものや他者とのかかわりを通して自己の輪郭を明確にし、なりたい自分を生きるようになることである。

【方法】2歳児、3歳児、5歳児クラスの保育場面におけるエピソード記録をもとに解釈的検討を行う。

【事例と考察】<事例7>洋服を放すことができない

E男(1歳児)がパンツを脱いだ状態でA子の洋服を左手でつかんでなかなか離そうとしない。E男の右手にはおもちゃが握りしめられている。両手で同時にものをつかんでいる状態である。つかむことをやめさせようと思って穏やかに話をするが、手放そうとしない。しばらく様子を見てみると、こんどはA子にかみつこうとする。しかたなくE男の手をA子から無理矢理はずし抱き上げて、高い高いを2～3回やってみる。すると、先からの険しい表情がとたんに笑顔に変わっていく。その後はA子に出会っても、何も無かったように平静を保っている。

考察4：今を切り捨てて、次に向う

身体の置き場を変えることでA子が視界から消え、そこに新しい刺激が加わることで気持ちを違う方向へ向ける。感情を切り替えるために、身体の向きを変えること、身体の置き場を変えること、身体を移動させること、また、違う刺激へ気持ちを向けさせることは、少しキャリアを積んだ保育者であれば日常で感覚的に行っていることである。身体の方角を変えてもらうことで、今を切り捨て次へ切り替える契機が生まれる。

<事例8 かみつきを我慢する>

お昼寝から目覚めるのが遅かったY男(1歳)がおやつを食べていると、その姿をD男(2歳)が見ながら、お菓子を指さして「Y君のやね、おいしい？」と2度ほど繰り返して尋ねる。D男はそう言いながら、その

(岐阜の保育を考える会)

近くにあったおもちゃを持って再びY男の近くにやってきておもちゃを弄ぶ。その姿を見ていたU男(1歳児)はD男のY男に対するかかわりの様子を見ながら同じようにY男にかかわっていく。U男は「Y男君のやねえ。おいしい？」と喋ってすぐに、今度は掃除機を指差し「掃除機」という。その瞬間、傍にいたD男の手に噛み付いた。

考察5：他者をなぞる

U男は、自分の欲求が通らないとき、噛み付くことが保育の中でしばしば見られる。1歳児にしては語彙量が多く、言葉を豊かに発する。言葉で自己表現し欲求を制御しているように見えるが、結果的にはかみついている。U男は、まだ自分の自我欲求をストレートに表現する年齢である。「食べたい」という思いを言葉で表現し欲求を抑えることで精神的な不均衡を生み、かみつく行為を起こさせていたように思われる。他者の行為をなぞりつつ、まだ他者の存在を取り込みきれず、自分が切り替えられない2歳児の姿がある。

<事例9>自分で掘った穴を飛び越していってしまう

3歳児H男が砂場で穴掘りをしていた。保育者を呼ぶので、しばらく砂場の外から見ている。穴が直径20cm、深さ15cmくらいになったところで近くに寄り座った。「先生、何したらいいかな？」と言うと、「一緒に穴を掘って」というので、穴を掘り始めた。一緒に掘り始めると、それまでは黙々と掘っていたH男が「よいしょ！よいしょ！大変だ」などと言いながら掘る。数分掘り続けたところで、突然H男は立ち上がり、穴の上を得意そうに飛び越え、もう一度往復運動のように反対側から飛び越え、どこかに去っていった。

考察6：満足して、それまでの自分を捨てる過程

穴を掘ることは、H男にとって今の自分を遊びきる自己目標になっている。その自己課題をやり終えたとき、彼はとても潔くそれらを過去のものとして捨て去る。穴を飛び越える姿は、彼が今までしていたことと決別する姿である。自己課題をやり遂げたことを自分で確認し、誇らしげに周りに見せつけて自己完結する。その満足感が、次の自分へと気持ちを切り替えさせる。

<事例10>ようしゅやまごぼうで色水遊びをする

3歳児のN男とB子とC男。3人で廊下にタオルをまことに几帳面に並べて遊んでいる。どれが一番長い

のかを競っているようである。自分のが一番長いことに気づいたN男はとてもうれしそうである。その同じ日、ようしゅやまごぼうの紫の実で色水遊びをしていたN男は、自分の色水をフィルムケースですくい、ペットボトルの中に地道に入れる。隣ではD男も同じように、お椀から直接、ちいさなペットボトルの口から色水を丁寧にゆっくりと入れている。こぼさないよう、真剣そのものである。少しずつお椀の傾き加減を調整しながら、入れる要領を覚えていく。N男はD男の方をちらちら横目で見ると、N男はD男がしている同じ方法で色水を入れ始める。

<事例 11> 友達をまねて型抜きする

3歳児のK子が、スライムを厚さ 5mm・15cm 四方ほどに手の平で平らにのばし、それを 2cm 四方のクッキーの型抜きで丁寧に型を抜いて遊んでいる。端から端まで、無駄がないようにと考えては抜く。抜いたスライムは、そのすぐ脇に丁寧に 12～13 個ほど並べられた。次にその抜いたスライムを丁寧に指先でつまみ、抜かれた部分に再びはめ込む。すべてはめ終わった後で、彼女はスライムを丸め、次の活動を始めた。この活動は隣で遊んでいた男の子が始めた活動だった。K子はそれまでその男の子がしている活動をじっと見ていたのである。その男の子がやり終えてから彼女も同じ活動をする。

考察 7：他者をなぞり、その視点を取り込む

これは、他者を見つめながら自分の行為と他人の行為を比較し、他者の行動様式を自己の中に内化して取り込んでいく。また、事例 6 では、型を抜いたところに再び抜いた型をはめるという行為に、他者の行為に関連させ、自己を他者の世界に同化させ、さらに自分の行為をもとにという可逆的行為によって自分の動きに帰結をつくり、自己完結させながら周りを取り込み自分のものにしていく。こうした経験は、子どもの他者の視点への気づきを作ると同時に、自己の世界に輪郭を作り世界を広げていく。

<事例 12> 自分の気持ちをわかってもらおうとする

T男は土・砂、木の実・葉っぱを鍋に入れ、それを小さなスコップで混ぜて遊んでいる。その横ではA子が 20 cm 四方で深さ 2cm ほどのお皿に砂を入れ、それをご飯用のしゃもじできれいに均している。そこに担任が 20 ひらほどのアベリアの花びらを拾って持ってきた。T男はその花びらを自分の鍋に入れ、ぐちゃぐちゃに混ぜる。A子は対照的に、そのはなびらを均した砂の上にきれいに並べる。A子とT男は同じ方向を見て並んで遊んでいる。しばらくしてT男は何を思っ

たのか、突然A子の作ったものの上に自分の混ぜた砂を「ばさっ」とあけた。A子はあっけにとられたような表情をしたあと、「どうしてこんなふうにするの？」ととても悲しげにT男を見る。T男は困った表情をするものの、どう応えてよいのかわからないといった感じである。しばらくしてA子はその場を離れ、近くで遊んでいる担任に「T男くんが、私のお料理こわした」と訴えにくる。担任は「そう、だめだね。」といって、引き続きひつつきぼぼの遊びを他の子としまじめた。その後、A子は地面に落ちてしわしわになった花見月の実を持って再び担任のもとを訪れた。その後違う遊びに行く。

考察 8—感情を気持ちを託したもので切り替える

花見月にはA子の気持ちが託されている。花見月の実を受け取るということは、この保育者にとって単なるもののやりとりにはすぎなかったが、A子にとっては、保育者にそれを差し出すことで、それまでの御しきれない気持ちを流し、自分を切り替えて次の遊びに向わせている。こうしたA子の行動は、保育者への信頼感によって支えられている。

<事例 13> とび箱をする。

5歳児クラスでみんなの活動として3段の跳び箱跳びの活動をした。T男は運動神経がよい。跳び箱を最初にした日も、並び順の一番前に陣取り、跳び始める。T男にとって3段はさほど難しくなく、あっさり跳ぶ。T男が跳び終えたとき、クラスの間みんなも跳び始める。しかし、なかなか跳べない。何度も挑戦し、40 分たっても誰一人抜けていかない。「あの子みたいに跳びたい」という気持ちが皆に共有されて、各々の自己目標になっていく。

考察 9：なりたい思いが自分を統制する

T男は他の子ども達にとって、あこがれの対象として映ったことだろう。T男はそれぞれの子どもの次の自分なのである。T男を見つめ、そのことであんなふうになりたいという「なりたい自分」を他者の中に発見する。それが次の自分の輪郭を作る。その「なりたい自分」が生まれることで、今の自分が統制されていく。もう一人の自分が今の自分を切り返していく。

【結語】幼児期における「保持する一手放す」基本的様式は、社会的状況では他者とのかわりを通して、他者を自己内に取り込みことでいまの自分を捨て次の自分を作り出していく過程と見ることができる。それは、自己欲求を表現することと外界からの要請を受け入れることの葛藤を調整するために、感情を切り替え、自己を統制する過程である。